

クライシス

〈危機〉から〈再生〉へ

—“Reflexive Sociology”の方向へ—

堤 史朗

はじめに

一九六〇年代後半から七〇年代にかけて、先進高度産業社会は〈不断の危機〉(The Endless Crisis)の時代を迎えた。科学技術の飛躍的發展に支えられての経済成長が、生命—生態系を破壊し、新たな差別と抑圧を生み、管理社会の昂進、等を結果した故に、現代社会を覆う矛盾の影はその色を濃くし、高度産業社会の抑圧性をめぐって、学生反乱を始めとして種々〈對抗文化〉^{カウンターカルチャー}の出現は、社会を大いに揺れ動かししたのであった。

六八年のフランス「五月革命」に自ら係わったA・トゥレーヌは、多様な運動が社会に「その歴史的現実を自覚させたこと、権力を告発し階級的諸関係を審問したこと、さまざまなイデオロギーやユートピアを湧きださせたこと、こうした点にその重要性がある。また、一個の社会とは単に経済成長の諸手段・諸効果の全体などではなく、まずは変化の方向を統制するため・また相互に敵対的な発展のパターンをつくりだすためにたたかう諸勢力の対決の場だ」という意識を人々に課した点に重要性がある⁽¹⁾と、現実に対する〈異議申し立て〉の重要性を繰り返し述べた。

歴史的現実に対する〈異議申し立て〉とは、我々が現代に至るまで至上のものとして来た〈近代的価値〉に対する〈反抗〉ないし〈對抗〉を意味し、今日、〈価値体系の崩壊〉が語られるのもこのことの結果としてあると見ることが出来る。既存の社会秩序に対する〈異議申し立て〉が、〈近代的価値〉に対する反抗、對抗だとすれば、近代社

会の産物として誕生した社会、科学としての社会、学も、これらの動きと全く無関係のままで居られるはずはなかった。事実、社会学そのもののあり方を問う「社会学運動」の展開にあって、支配的な社会学理論であったT・バーソンス流の構造機能主義が、システムとしての社会の安定性の源泉として人々の間に分有される道徳的価値を重視し、社会秩序の現状維持に委託しつつ、支配的諸制度を許容するのは、保守主義的であると幾多の批判に晒されたのである。社会の激変期に直面した社会学は、方法論をも含めて社会学そのもののあり方が改めて問い直され、幾つか新しい社会学理論の潮流が生まれた。

新しい問題状況にあって、現実に対応し得ないでいる社会学と社会学者の自己反省を促した「社会学の社会学」、これまでの社会学が「価値自由」の名のもとに現実には現状維持のイデオロギーと化した点を批判して、「批判と実践」の社会学樹立に向けて社会学者自身の変革を求めた「ラディカル社会学」、またこのような潮流にあって、フランクフルト学派の「批判理論」への再認識があった。M・ホルクハイマー、T・W・アドルノ、H・マルクーゼE・フロムらの影響を受け、いわゆる「価値自由」的 sociology を批判して、日常生活での抑圧形態の理解に基づく「解放の社会学」、加えて、ミクロな日常生活の場面への社会学的洞察として、G・ミード、C・H・クルーラーにその源流をもつ「シンボリック、インタラクシニズム（象徴的相互作用論）」、E・フッサールの現象学の流れにあってA・シュッツによって基礎づけられた「現象学的社会学」、等。

これら新しい潮流の何れもが、アメリカ社会で対抗的に生まれ出たことに関心を持つとともに、社会的状況と社会学のあり方に関していえば、社会学が誕生以来、学問的使命として持つ時代状況への批判的観点が、いわば社会学の学問的故郷への恢復として、社会学に新しい流れを喚起したのだ、と考えたい。

「自己反省の社会学」の構想

新しい流れの中で、社会学理論に最も根源的な問題提起をし、自ら問題解決の糸口を求めて、積極的な著述活動を世に問うているA・W・グールドナー (Alvin Ward Gouldner) の提唱する「自己反省の社会学」(Reflexive Sociology) の構想より、変動期における社会学理論と問われるべき社会学者のあり方——社会学者として生きること (Living as a Sociologist) について考えることとする。

△病める現代社会△に対して社会学があまりにも空しく、現実的な説得力に欠けることが△危機△としてあり、「新しい社会の理論を深め、総体的対抗文化の構築にいますぐに着手」⁽²⁾し、それも「ささやかな技術的修正を要する」というのではなく、むしろ根本的な知的変改が緊急に必要⁽³⁾であることが、グールドナーにとって『迫り来る西欧社会学の危機』(The Coming Crisis of Western Sociology, 1970) 認識であり、そこから「社会学の再生」が渴望されたのである。

グールドナーの危機認識および問題意識はこの書の構成からだけでも知ることが出来る。

I部・社会学／矛盾と下部構造は、「社会学の社会学」の観点から、現在までの社会学理論と歴史を論じ、社会学理論の歴史的形成と展開とが批判的に跡づけられる。II部・タルコット・パーソンズの世界において、「社会学の社会学」研究のモデル・ケースとして、パーソンズ流構造機能主義のはらむイデオロギー的性格の問題性が問われ、III部・西欧社会学の危機では、社会学の危機的状況を、福祉国家への移行に照応するものとして捉え、支配的社会理論である機能主義とマルクス主義との接近ないし収斂の世界的傾向が明らかにされる。そして最後にIV部・エビログ／理論家の自己回復で、現代社会学の危機の超克を願って、「社会学の社会学」、「ラディカル社会学」あるいは「自己反省の社会学」が問題提起されるのである。

現に存する社会学の超克を企図し、「社会学者を変換させて、かれの日常生活および仕事に深く降り立たせ、新し

い感受性をもたらし、社会学者の自覚を新しい歴史的水準にまで引き上げること」を「自己反省の社会学」の歴史的使命とするグールドナーによれば、「特定の研究方法の使用は、必然的に、人間と社会に関する特定の仮説の存在をふくむ」が故に、社会学の性格を探究し、社会学とは何かを知るためには、「人間と社会に関する最も奥底の仮説」を見極めることが必要であることを説き、社会理論を「人間的・社会的所産として」理解すべきだと主張する。というのも、社会学探究の源泉と動機と目的とは互に関係を持ち、社会理論は個々の理論家が他の人々と相互に織り成す社会的世界における彼自身の個人的経験の一部を、限定的な仮説の出発点にする場合の多いことを認めるからである。依って、グールドナーの努力は、「社会理論と理論家とを理解することに……、社会学の共同体の集合意識を結晶化し、この共同体に自己認識をもたすような人びととその作品とを理解することに」注がれるのである。⁽⁶⁾

言わば、現に存する社会理論の上下部構造⁽⁷⁾に対して、反省を加えることこそが、「自己反省の社会学」であり、その構想は次のようにまとめられる。⁽⁸⁾

(一) 「自己反省の社会学」は、世界についての知識が、自己自身および社会的世界における自分の位置についての知識を離れては、また自分や世界を変えようとする努力を離れては、発展し得ないことを認める。

(二) 「自己反省の社会学」は、社会学者の外にある外的世界および自己の内なる外的世界を、ただ知ろうとするばかりではなく変換しようとする。

(三) 「自己反省の社会学」は、社会学の基根は総体的人間としての社会学者を貫流しており、したがって社会学者の直面する問題はいかに働く(how to work)かということではなくいかに生きる(how to live)かの問題だ、という事実を受け入れる。

したがって、いかに生きるかの、全体的実践の構想としての「自己反省の社会学」は、「公的で集合的なものと身近かで個人的なもの」の間に、また時機に應じての政治的活動と日常生活の間に、それぞれ差をつけて分離的にと

らえるものの見方を拒否⁽⁹⁾し、専門的技法の束と化した社会学のあり方に、さらに社会学者の研究行為について厳しい反省を迫るのである。

「われわれ自身の社会学的自己および世界におけるわれわれの位置への理解を深めることによって、われわれは同時に、他の人びとおよびかれらの社会的世界をよりよく理解できる新種の社会学者を産み出すことへの手助けができるだろう。総じて自己反省の社会学の意味するところは、われわれ社会学者は少なくとも、現在われわれが他人の信条を見るようにしてわれわれ自身の信条を見ることができるような、深く身についた習慣を獲得しなければならぬ⁽¹⁰⁾」。そのため「自己反省の社会学」は、自己自身を反省的に考察する（自己認識の覚醒）（*self-awareness*）と（方法論的二元論）（*methodological dualism*）の放棄を求める。

因習的な実証主義は、研究者が情報体系と直接的に接触する限り事実には偏りや歪みが生じがちだと考え、（客観性）（保持のために、研究者は研究対象から非人格的な距離をおくよう強調する。故に、方法論的二元論の立場は、研究者（研究主体）と情報体系（研究客体）との相互の関係のあり方こそが、研究をより実り豊かなものにし、研究に活力を与える動機の源泉にもなる、という点を欠落させたままということになる。

しかも、方法論的二元論は、研究主体と研究客体との分離のうちに大きな矛盾をはらむ。すなわち、社会学者が他の人々をみるとときには、「人間は文化と社会構造によって形成される」とのより基底的な社会学のタームを採用するけれども、自己自身についてみるとときには、「人間はみずからの文化を形成する」という仮説を無前提に用い勝ちである。ことは辻つまあわせであって、研究主体と研究客体とは全く異なるイメージにおいて捉えられ、「自己」は一種のエリートとみなされ、（他者）は一種の大衆とみなされる（*the "self" tacitly viewed as a kind of elite, the "other" as a kind of mass*）⁽¹¹⁾とった差別的観点を暗黙のうちに下しているということになるのである。

結果、社会学者として研究していること（役割上の現実）と、彼自身の（個人的現実）との断絶を拡大する働き

こそが、社会学的方法論の役割ということになって仕舞う。△客観性▽要請に依え、歪みを減少するのに役立つと仮定しても、社会学者の自己認識の曖昧化という犠牲を支払って手に入れたものであってみれば、「方法論が厳密であればあるほど、社会学者はそれだけ鈍感になり、社会的世界に関する情報が信頼できればできるほど、自己自身に関する知識はそれだけ洞察力を失⁽¹²⁾」い、現実社会のあり様が正確には把握され得ないということになる。

社会学が、社会に生きる人間をみることにあるのなら、他の人々をみるように、社会に生きる研究者自身もみなければならぬ。そのためには、社会学者が主体と客体、研究する社会学者と研究される△しろうと▽とを、二つの識別できる異なった人間と見なして活動することを止める必要がある。何となればそこにはただ△一種類の人間▽が居るだけなのだから。社会学者は、彼の専門職業上の方法論的な信念が如何に一元論的かということを探みることなく、二種類の人間が居るといふ暗黙の二元論的前提に立つて研究活動をして来たこと⁽¹³⁾についての反省こそが、社会学者の自己認識の覚醒であり、自己変革への途ということになる。

但し、グールドナーが、「問題は、観察されたことを実証することにも、新しい観察結果を生産することにもない。むしろ、ひとが実際に生きてきた生の意味を位置づけ、解釈することこそが問題なのである⁽¹⁴⁾」という時、認識の方法として△一体化▽ (Identification) が強調されるが、△方法論的三元論▽への批判から、短絡的に△方法論的一元論▽ (methodological monism) の主張に結び付くことは、主体—客体の研究における役割の相異を混同するといふ問題点も残していることを付言しておくべきだろう。

△価値自由▽について

グールドナーの提唱になる「自己反省の社会学」の構想は、必ずしも完結したものではないが、社会学と社会学者の研究行為に対する厳しい現状批判から出発し、以って社会学と社会学者に対して特にその実践性を要請する点にそ

の基本的性格を認めることが出来る。だとすれば、社会学と社会学者は「価値」の問題に対して如何に取り組むよう求められるのだろうか。

グールドナーは、社会的世界における社会学者の存在価値が、社会的欠陥の究明と、それに伴ってその欠陥をうまく処理できるアイデアと情報の必要性に係わり、皮肉なことに「社会学者の個人的機会は社会の危機の深化とともに増大する」ことを指摘して、〈価値自由〉(Wertfreiheit)および〈自律性〉(Autonomy)をめぐっての社会学者の在り方を重要な問いとする。「社会学者の成功の個人的現実と、社会の欠陥に関する職業上生じる認識との緊張は多くのばあい、政治的自由主義にその解決を見出す。なぜなら、このイデオロギーは社会の本質的前提に挑戦せずに、その諸欠陥をなおす治療法をさがしだすように、社会学者をさせるからだ。……自由主義のイデオロギーは現代社会学者の自律性への主張の政治的対応物である。自由主義は自律性なる伝統的な職業イデオロギーがなびきがちな政治の方向なのである」⁽¹⁵⁾とは、社会学者がしばしばより保守主義的傾向へ向かうことに對する懸念の表明であるとともに、そもそも自律性とはどんな意味なのかも問わずに、〈客観性〉(objectivity)をうんぬんする社会学者の多くが、現実には、現状維持のイデオロギーないし政策擁護者に墮していることに對する危機認識の表明でもある。

「自己反省の社会学」は、社会学と社会学者、彼らの職業的役割、彼らのキャリアに伴う〈先入観〉、彼らの既存の体制、権力体系、下位文化、そして彼らのより大きな社会的世界における位置までに広く及ぶ経験的調査の次元を必要とする⁽¹⁶⁾。しかしながら、「自己反省の社会学」が経験的な次元をもたねばならないにしても、これがそのまま主導的な理論の性格を決定する事実的基盤を形成するものと認める立場にはない。「自己反省の社会学」からすれば、社会理論を、たんに調査や事実からの帰納の結果とは考えてはいないということ。そしてより重要なことは、これらの調査あるいは事実結果を〈価値自由〉とは考えていないということである。なぜなら、今日、一般に行われている社会学者の手になる経験的調査の多くが、始まりの動機から結びの結果まで、ある特定の価値を身に帯び促進されて

いる、と考えざるを得ないことによる。

そもそも「価値自由」とは、因習的な実証主義的客観性を意味するものでは決していない。問題は、「何のための社会学者か？」を社会学者自らが、研究者としての自己自身の研究姿勢、態度に問いかけてみるところに存するはずである。この点、グールドナーに倣って、そのプログラムを列記すれば次のようである。

(一) 研究行為は、社会学的企てを成熟させるための必要な条件ではあっても充分な条件ではない。真に必要なのは社会学者の人間それ自体を変えるような新しい実践である。

(二) 社会学者自身、ある特定の社会、特定の時代において、自分は誰であり何者であるか、また如何に彼の社会的役割と個人的実践とが、社会学者としての彼の仕事に影響を及ぼしているか、といった明識を深めること。

(三) その作業の求めることは、他者の社会的世界についての、妥当で確実な情報を生産する能力を深めることであると同時に、社会学者の自己明識を深めることにある。

(四) 社会学者は、自己自身を敵対的な情報に対して開いたものにする補助的な技法や装置ばかりではなく、作業の全段階を通して姿を表わす明識という価値に対して永続的にコミットしていかなければならない。

おわりに

六〇年代後半以降の新しい問題状況の簇生に際してもなお、現実社会への具体的理解を欠いたまま「誇大理論」を振り回すにすぎない理論社会学者および「客観性」——「価値自由」を御題目とし、隠れ蓑として瑣末的な断片的な事実収集、調査結果のみ積み重ねることをもって良しとしている調査至上主義に取り付かれた社会学者、各々に対して烈しい憤りを持つ「自己反省の社会学」の提唱は、これまでの社会学や社会学者が自明のこととしてきた「価値自由」的 sociology と衝突せざるを得ない。一つは、価値自由の社会学の可能性を否定し、その価値に疑問をもつ点におい

てであり、いま一つは、価値にコミットする社会学の益するものと同様にその危機性をも認めることにおいてである。というのも、人間とは、自分が価値をおく事柄と矛盾するような情報は容易に受け付けようとしなからである。にも拘らず、「自己反省の社会学」は、「価値へのコミットメントに伴う危険の方を甘受する。なぜなら、それはドグマ的でひからびた価値自由の社会学のように歪みをもって始めるよりも、歪みをもって終る危険の方を選ぶ」⁽¹⁸⁾からである。

△価値自由▽を標榜する社会学者の多くは、自己自身が位置するところについて、多少の抵抗があろうとも濁った水の流れから清い水の流れを求めて生きようとしないうのみならず、清い水の流れに居るのか、それとも濁った水の流れに居るのかを自らに問うこともなく、ただ単に水の流れに身をまかせているにすぎない、いわば△価値ニヒリズム△の社会学とでも呼ぶしかないところに陥っていることに気が付かない、否むしろ気が付くことを避けている存在にしかすぎない自己自身を反省してみる必要があるだろう。

先の見通しを立てにくい、確かに危機的状況にある現実の社会に対して、戦いそのものを回避するところにも、また何ら社会的意味のある問いを持つことなく、現状への追隨に留まっているところにも、社会学も社会学者も無いことに心を致し、積極的に△価値理念を明確化▽していくところにこそ、社会学の営為、作業があるということを知るべきである。

現実科学としての、社会科学としての社会学とは、時々の社会的、政治的状況との緊張関係において、「何のための社会学か？」との問いを基点とし、研究者としての自律的主体的態度を堅持していくところにこそ、真の△価値自由の意味があり、△危機▽から△再生▽へ向けての社会学の今日的課題があるはずである。

自律性の価値を肯定することは、社会学者の述べることがかれ自身の物語でなければならぬこと、かれが真に信じ、かれがみずから信奉する説明でなければならぬと主張することでもある。自律性は誠実さの主張の一形態なのである。もし人間が△全体

的真理 ∇ を述べることができぬなら、そのさいには少なくとも、自己自身の真理を述べるように努力すべきだ、ということである。たぶん、こうすることによって、自由主義的仮説の枠組の内で \wedge 客観性 ∇ にいちばんちかづくことができるであろう。⁽¹⁹⁾

社会の危機的状況を乗り越える毎に、社会学は発展して来たとはG・ギェルヴィッチの言である。がしかし、今日の社会的状況と社会学のあり方を見るにつけ、今後の社会学の発展は見極めがつけ難い。その意味において、現代社会における非人間化の趨勢に抗しうる、人間主義的観点からのグールドナーの提唱を受け、今こそ社会学は、社会はどこからどこへ向かうかを明確に差し示す理念基準を持った理論形成に取り組まねばなるまい。

(1) A. Touraine, *La société post-industrielle*, 1969. (寿里茂・西川潤訳『脱工業化の社会』邦訳、二六〇頁。様様な異議申し立て ∇ 運動が、結果は、既存のあり方にほんの少しの動揺を与えたに過ぎなかったことも、歴史的現実の教えるところである。)

(2) A. Gouldner, *The Coming Crisis of Western Sociology*, Heinemann, 1971, p. 5. (岡田直之他訳『社会学の再生を求めて』第一分冊、一九七四年、五一六頁。)

(3) *Ibid.*, p. 34. (邦訳、第二分冊、四三頁。)

(4) *Ibid.*, p. 459. (邦訳、第三分冊、一九七五年、二〇九頁。)

(5) *Ibid.*, p. 28. (邦訳、第一分冊、三五一六頁。)

(6) *Ibid.*, p. 483. (邦訳、第三分冊、一九九頁。)

(7) グールドナーは、社会学理論と理論家の理解のために、社会学理論の準(サブ)理論的レベルを問題とする。つまり、社会的世界における研究者の個人的経験を基底において理論や理論家を解釈しようとの「経験的リアリズム」(empirical realism)の立場に立ちつつ、準理論の存在を容認しない方法論的経験主義や方法論的二元論を批判するのである。

ところで、社会学理論の「下部構造」(infrastructure)とは、社会学理論の準理論的レベルのことで、それは「領域仮説」(domain assumption)——理論を彫琢し、感情に焦点を与えるもので、人間と社会に関する適用範囲の最も限定された仮説——

と、「感情」(sentiments)——理論家は、日々の個人的現実 (personal reality) の中において、様々な個人的経験 (personal experience) をもつが、この体験を基底として育くまれるもの——との二種類から成るものとされている。

「なにがハリアルであるかに関する社会学者の考えの重要な部分は、かれらがその文化のなかで学習した領域仮説から派生する。しかし、社会構造の異なる部分での個人的経験が、これらの文化的に標準化された仮説を分化させる。特殊感情を生みだす経験によって個人的強勢をつけられ、一般的領域仮説はやがて個人的配置をとって、個人のパーソナルな現実の一部となる」……Ibid., p. 41. (邦訳、第一分冊、五二頁。)

- (8) Ibid., p. 489. (邦訳、第三分冊、一〇九頁。)
- (9) Ibid., p. 504. (邦訳、第三分冊、一二九頁。)
- (10) Ibid., pp. 489~90. (邦訳、第三分冊、一〇九頁。)
- (11) Ibid., p. 55. (邦訳、第一分冊、六九頁。)
- (12) Ibid., p. 56. (邦訳、第一分冊、七一頁。)
- (13) Ibid., p. 490. (邦訳、第三分冊、一二二頁。)
- (14) Ibid., p. 484. (邦訳、第三分冊、一〇二頁。)
- (15) Ibid., p. 59. (邦訳、第一分冊、七五頁。)
- (16) Ibid., p. 491. (邦訳、第三分冊、一二二頁。)
- (17) Ibid., pp. 494~5. (邦訳、第三分冊、一二六~七頁。)
- (18) Ibid., p. 499. (邦訳、第三分冊、一二三頁。)
- (19) Ibid., pp. 59~60. (邦訳、第一分冊、七六頁。)

(付記)

本稿は、七九年度明星大学「社会学科研究報告会」にて、学生向けにA・W・グールドナー、『The Coming Crisis of Western Sociology』の紹介を意図して発表したものの原稿を紙幅に応じてまとめたものである。

(つづみ しろう、本学専任講師)